

### (9) 他の調査活動

以上年報は 41 頁にわたり、相当詳述され、興味深いものがあるが、紹介は後日とする。

(宇田道隆抄録)

## 6 日本海沖合スルメイカ回遊の新知見

出所：日本海区水産試験研究連絡ニュース日水研刊。第 184 号、1966 年 10 月、<sup>(1)</sup>伊東祐方「日本海沖合のスルメイカ調査から、<sup>(2)</sup>町中茂「沖合のスルメイカ漁業と今後の方向、<sup>(3)</sup>同 186 号、1966. 12 月「日本海沖合の放流イカ韓国沿岸で再捕さる」

大和堆を中心とする日本海沖合のスルメイカは同時期の沿岸のスルメイカに比べて外套背長が大きい。また沖合群は秋季に入つて南下移動の傾向がみとめられる。1963 年 9 月 6 日～15 日日水研みずほ丸調査結果によると、分布密度の高い海域は大和堆～竹島を結ぶ海域の北西側の沖合にあるようであり、大和堆西端地点で昼間の 2 時頃から、夜間の釣獲水深より幾分深い層から夜間におとらない漁獲をえた。(近年、毎春 5 月を中心として佐渡外浦沿岸域でスルメイカの昼釣漁業が一般化している。) 沖合群の移動を検証するため約 3,000 尾の標識放流を行ない、これまでに大和堆上とその近くで放流したものうち 5 尾が放流後約 1 カ月を経過した、10 月 11～14 日の間に山陰海域(2 尾)と対馬海域(3 尾)で再捕された。その後韓国の水産振興院から韓国漁業者によつて 12 尾の再捕連絡があつた。これらは 9 月中旬大和堆付近で放流。そのうち再捕月時、場所の判明している 7 尾については、9 月 25 日～10 月 8 日の間に 38°付近から 36°N 付近にかけての韓国東岸側の距岸 30 哩から沿岸で再捕されている。沖合群の移動を検討するに貴重な資料である。

大和堆を中心とする日本海沖合スルメイカ漁場開発調査は昭和 37 年から日水研、各県水試及び漁業者の協力で推進されて来て、今日では 7 月～9 月、3 カ月間は完全に企業化され日本海漁業「夏枯れ」対策の一つとして十分な成果を収め、この漁場へ出漁する漁船の数は増加の一途をたどつている。

1966 年夏出漁石川県能登船団は 20 トン以上の船が 60 隻、12 トン未満が 4 隻、計 64 隻(小木漁協所属、日本海マス流刺網漁従事)で、延航海数 221 回、総漁獲約 3,200 万尾(水揚 1 億円を上廻つたとみられる)。船別航海数最高 8 回 2 隻、7 回 5 隻、6 回 8 隻、他は 5 回以下。一航一隻当たり平均漁業獲量 20 トン以上、大型船で 700 箱(1 箱 20 尾入)、小型船 300 箱ほど。一航で 1,600 箱もの漁獲を記録した船もあつた。好漁場となる大和堆が日本海のほぼ中央部に位置し、本土側から一番近い能登半島最先端からでさえ約 160 マイル離れているため漁場への往復 2 昼夜近くかかり、小木漁協燃油 400 万円、氷代 700 万円、魚箱代 800 万円ほどで、その他経費を含め全体では水揚金額の 35% 程度になつている。

(宇田道隆抄録)

## 7 強化ガラスのプラスチック沿岸測量艇と漁船

1) 英国海軍水路部の発注で 8 隻 Glass Reinforced Plastic (GRP) 測量船が

Hawker Siddley 会社で建造された。船の長さ 35 フィート、幅 10 フィート、最大速力 9.5 ノット。船体はガラスファイバー強化ポリエステル樹脂、舷側甲板と縁板を主船体に型入れして「極度に岩丈な、丸く湾曲した外殻」にした。エンジンは GRP の音響吸収構造と Polyurethane 泡の中に収納した。硬い泡浮力物が船体内に加えられた。この船は母船を補助する沿岸側量艇として使用せられる。

2) はじめてファイバーガラス強化ポリエステル船の型どられたのは約 20 年前で、ヨットや遊覧船として丈夫で信頼できる漁船に RP ハルが用いられるようになった。ロイド登録 20 ~ 100 フィート長漁船建造に、RP ハル 50 フィート以上にとられた。南アフリカで 1963 年 67 フィートのイワシ漁船(旋網) Western Dawn 号が PVC サンドイッチ法でポリウレタン泡をサンドイッチ芯にして造つた。日本もマグロ船に 54 フィート RP ハルのをもつ。ケープタウンで又 60 フィートのスタートローラー、74 フィートの旋網船が建造された。

(宇田道隆)

## 8 海洋生物群聚の生産力

PM: The Productivity of Marine Communities

1964 年 IBP (International Biological Program 国際生物調査計画) 計画委員会、SCOR, FAO の ACMRR の代表者の集つた小委員会 (コンビーナーは R. S. Glover,) での提案の要結は次の如しである。

### 基本原則

- 1) 海洋は世界的なひろさで続いており、色々変化の多い状態にあるから、国際的協力は必須のもので、それで比較研究が広い地理的規模でなされる。協力作業は選ばれた基本問題への研究努力のために望ましい。
- 2) 自然資源推算の大切な方途はそのような直接推算のやれる (通常、水産業の存在する) 場所で資源自体を研究することである。しかし資源研究は孤立ではやれない。漁業生産は大かた死亡率、再生産、回遊、集群行動 (それらは食物供給及び海洋環境の生物学的、物理化学的特徴にその予報の成功及び漁業規制は全生態系の適当な理解に依存する。
- 3) 多くの水産生物学者は漁業研究進歩の重大な障害は海洋生物一般の生態学及び生理学の現在の知識の不満足な状況にあるとしている。この不適当さは、
  - (1) 海洋生物群聚の組成と分布を知らぬため
  - (2) 食餌要求、このような群聚の魚種の生理生態に無知なるため
  - (3) 現在ストック有機的合成及び有機的破壊、再生産及び死亡と異なる栄養水準内及びその間のエネルギー交換網の短期、長期の変化率に無知なるため
- 4) 海中の栄養連鎖を通じてすべての種類の海洋生物の数量、分布、生産力をコントロールする基本的生態機構の我々の理解を改善する方向に諸計画プログラムを向けるべきである。